

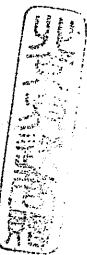
トリアッチ同志と
われわれとの
意見の相違

1962-12-31

外文出版社
北京

トリアッチ同志と
われわれとの
意見の相違

外文出版社
北京



トリアッチ同志とわれわれとの意見の相違

(一九六二年十二月三十一日付『人民日報』社説)

イタリア共産党は、国際共産主義運動の隊列のなかでも名譽ある闘争の歴史をもつ党である。イタリアの共産主義者とイタリアのプロレタリアートは、ムッソリーニの暗黒支配の時期においても、第二次世界大戦中の苦難にみちた年月および戦後の時期においても、敬服すべき勇敢なたかいの業績をのこしている。中国の共産主義者と中国の人民は、イタリア共産党の同志たちとイタリアの人民にたいし、まえから深い尊敬の念を抱いている。

中国共産党は、兄弟党との友宜をつよめるといふ一貫した立場から、十二月のはじめにひらかれたイタリア共産党第十回大会にも、招きに応じて代表を出席させた。もともとわれわれは、この大会が帝國主義反対、世界平和擁護の共同闘争をつよめ、国際共産主義運動の団結をつよめるのに役立つことを期待していた。

ところが残念なことにはわれわれの希望に反し、この大会で、トリアッチ同志をはじめイタリア共産党の一部の指導者はモスクワ宣言とモスクワ声明の規定する兄弟党の關係についての準則

にそむき、敵にたいする国際共産主義運動の団結の利益をかえりみず、一連の重大な原則問題のうえで、粗暴にも中国共産党その他の兄弟党を攻撃した。

イタリア共産党のこの大会に出席した中国共産党の代表はそのあいさつのなかで、中国共産党にたいするトリアッチおよびイタリア共産党の一部の指導者の攻撃と中傷に同意できないむねを厳正に声明しないわけにゆかなかつた。だが、トリアッチおよびイタリア共産党の一部の指導者は、中国共産党代表の出した意見を「だんこ拒否する」ことを表明するとともに、ひきつづき中国共産党その他の兄弟党を攻撃し、またどこまでも「公開的な討論」をおこなうことを要求した。

こうして、イタリア共産党の第十回大会は、最近あらわれたマルクス・レーニン主義にたいする違反、国際共産主義運動の団結破壊という逆流の顕著な一部をなすものとなつた。

こうした状況のもとでは、われわれとしても、われわれにたいするトリアッチその他の同志の攻撃について、かれらが発表した、マルクス・レーニン主義の基本原理にそむき、モスクワ宣言とモスクワ声明の革命的原則にそむくいくつかの観点について沈黙をまもるわけにゆかず、公開的な答弁をおこなわないわけにゆかない。われわれは、トリアッチ同志およびイタリア共産党の一部の指導者とわれわれとのあいだには、マルクス・レーニン主義のいくつかの根本問題のうへ

で原則的な意見の相違があることを率直にのべたい。

イタリア共産党第十回大会でのトリアッチの一般報告と結語をよむとき、イタリア共産党第十回大会のテーゼをよむとき、われわれは、トリアッチおよびイタリア共産党の一部の指導者がマルクス・レーニン主義からいよいよ離れ去つていることを感じないわけにゆかない。トリアッチその他の同志は例の海濱で、あいまいで、わかりにくいことばをつかつてかれらの真の観点を隠蔽、粉飾することに慣れているが、その薄いベールをめくれれば、かれらの観点の本質もはつきり見えてとることができる。かれらは、帝国主義にきわめて大きな幻想をいだき、社会主義と資本主義という二つの世界体制の根本的対立を否定し、被抑圧民族と抑圧民族との根本的対立を否定し、国際的規模における階級闘争と帝国主義反対の闘争を国際的規模における階級協力にとりかえて、いわゆる「新しい国際秩序」をうちたててることを主張している。かれらは、自国の独占ブルジョアジーにきわめて大きな幻想をいだき、ブルジョア独裁とプロレタリア独裁という二つのまったく異なつた階級独裁を混同し、プロレタリア革命をブルジョア改良主義、べつのことばでいえばいわゆる「構造改革」にとりかえることを主張している。かれらは、マルクス・レーニン主義の基本原理を「時代おくれ」のものともみなし、マルクス・レーニン主義のなかの帝国主義についての学説、戦争と平和についての学説、国家と革命についての学説、プロレタリア革命とプロレタ

リア独裁についての学説をあらためた。かれらは「モスクワ宣言とモスクワ声明の革命的原則を放棄し、プロレタリア革命の共通の法則、つまり十月革命の道の普遍的意義を否定するとともに、いわゆる「イタリアの道」、いかえれば革命をやらない道を「国際共産主義運動の共通の路線」というふうにいっている。つまるところ、トリアッチおよびイタリア共産党の一部の指導者の主張は、実際には、資本主義各国の人民は革命をやつてはいけない、被抑圧民族は解放をめざす闘争をやつてはいけない、全世界の人民は帝国主義に反対する闘争をやつてはいけない、ということになる。これらはすべて、実際には、帝国主義と反動派の需要にこたえるものである。

われわれはこの論文で、トリアッチ同志およびイタリア共産党の一部の同志とわれわれとのあいだの意見の相違のすべてについて議論するつもりはなく、ただそのなかのいくつかの重大な問題についてだけわれわれの見解をのべることにする。

(一)

トリアッチ同志および一部の同志とわれわれとのあいだの意見の相違は、まず戦争と平和の問題のうえにあらわれている。イタリア共産党のこんどの大会での一般報告のなかで、トリアッチは、「一九六〇年の秋にモスクワでひらかれた共産党・労働者党会議で、この問題はひろく討議

された。そのさい、中国の同志たちはある種の観点についてのべたが、会議はこれらの観点を拒否した」といっている。トリアッチはわざとことばをにぎして、中国の同志たちがいったどのような観点についてのべたかを口にしなかつたが、しかしかれはすぐそのあとで、戦争の不可避性が全論争の出発点になつた、といっている。明らかにこれは、中国の共産主義者が新世界戦争回避の可能性を信じないといつてこれを非難するものであり、中国を「好戦的」として非難するものである。

中国共産党にたいするトリアッチ同志および一部の同志のこうした非難は、まったく根拠のないものであり、でつちあげの上になつたものである。

△帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対し、帝国主義による新たな世界戦争のほつばつを防止し世界を平和をまもること、これは中国共産党の一貫した立場である。われわれは、△帝国主義が存在するかぎり、侵略戦争発生の土壌も存在するものと一貫して考えている。帝国主義が世界戦争をおこす危険性は去っていない。△だが国際的な階級間の力関係に新たな変化がうまれているといった事情のもとでは、全世界の平和勢力が連合し、アメリカをかしらとする帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対する統一戦線をつくつてたんにたかつてゆくかぎり、帝国主義が新たな世界戦争をおこすのを防止することができ、△もしも帝国主義が冒険をあえてして新たな世界戦争

を世界人民におしつけるなら、戦争の結末はかならず帝国主義の滅亡と社会主義の勝利となるであらう。一九五七年のモスクワ会議でも一九六〇年のモスクワ会議でも、われわれはこうした観点についてのべた。二つのモスクワ会議が採択した共同の文書には、われわれのこうした観点ははいっており、トリアッチのいうように拒否されてはいない。

トリアッチおよび一部の同志は、戦争と平和の問題についての中国共産党の立場をよく知っていながら、一途にこれを歪曲し攻撃しているが、これはいつたいどうしたわけか。かれらとわれわれとのあいだの真の意見の相違はいつたどこにあるのか。

これは主としてつぎの三つの問題のうえにあらわれている。

第一、中国共産党は、現代における戦争のみならず帝国主義であるとみている。アメリカ帝国主義は侵略と戦争の主要勢力であり、全世界人民のもつとも凶悪な敵である。世界の平和をまもるためには、たえず帝国主義の侵略政策と戦争政策を徹底的に暴露することによって、全世界の人民に高い警戒心をもたせなければならぬ。社会主義の勢力、民族解放の勢力、人民革命の勢力、世界の平和勢力が帝国主義の勢力と戦争の勢力をしのいでいるということは、帝国主義の侵略的本性をかえさせてはいないし、また、かえさせることもできない。アメリカをかしらとする帝国主義ブロックはいま軍備拡張・戦争準備に狂奔して世界平和をおびやかしている。中国共

産党を攻撃する人びとは、われわれがあくことなく帝国主義とりわけアメリカ帝国主義の侵略と戦争計画をあばきたてているのを、われわれが世界戦争回避の可能性を信じないものとして中傷しているが、実際にはかれらは帝国主義を暴露することに反対なのである。かれらは多くの場合、帝国主義を暴露することに公然と反対している。かれらは、口先では帝国主義の本性がかわつていないことをみとめながら、実際には百万手をつくして帝国主義を美化し、人民大衆のあいだに帝国主義とりわけアメリカ帝国主義にたいする幻想をばらまいている。

三年まえ、「キャンプ・デービッドの会談」のあと、国際共産主義運動の隊列のなかである人が、アイゼンハワーはここから平和をのぞんでいるといつて宣伝にこれつとめ、このアメリカ帝国主義の親玉もわれわれとおなじように平和のために気をもんでいるのだと言ったことは、まだ記憶にあたらしいところである。一九五九年十二月に、アイゼンハワーがヨーロッパを訪問して、イタリアに到着したさい、イタリア共産党の一部の同志がこともあろうに標語をはり、ピラをまき、盛大な歓迎のおぜん立てをし、イタリアのすべての政党と各階層の人びとに一致してアイゼンハワーに「敬意を表する」ようもとめたことも、また記憶にあたらしいところである。歓迎の標語のなかにはこういうことがあった。「ローマの共産主義者はアイゼンハワーを歓迎するとともに、首都の選挙民二五万を代表してつぎの確信と希望を表明するものである——アメリカ

カ大統領とソ連首相との会見が各国人民の胸に植えつけた平和にたいする偉大な希望が消えさらないことを！」（一九五九年十二月四日付『ウニタ』紙参照）

現在われわれはまたある人が、ケネディは、アイゼンハワーよりもいちだんと世界平和に関心をもっているといつて宣伝し、ケネディはカリブ海の危機に際して平和擁護についての配慮をしめしたというようなことを言っているのを耳にしている。

アメリカ帝国主義を飾り立てるこうしたやり方は世界平和をまもる正しい方針だろうか。アイゼンハワー政府がスパイ機をとばしてソ連を侵犯し、ケネディ政府がキューバを侵略し、アメリカ帝国主義が世界のいたるところで侵略をおこない、世界平和をおびやかしている数々の事実は、アメリカ帝国主義の親玉が平和の天使といったようなものではなく、好戦的な悪魔だということを知りかえし証明するものではないだろうか。いちどならず二度、三度までも帝国主義を美化するそうした人びとは、故意に全世界人民をたぶらかしているのではなからうか。

こうした人びとの説によれば、アメリカ帝国主義はもはや世界平和の敵ではなく、したがってアメリカ帝国主義の侵略政策と戦争政策に反対する闘争をやる必要はないということになるのは明らかである。モスクワ宣言とモスクワ声明に公然と違反するこの誤った観点は、全世界の平和を愛する人民に方向を見失わせるもので、世界平和を守るたたかいかにとつては有害であり、アメ

リカ帝国主義がその侵略政策と戦争政策をおしすすめるうえに役立つだけである。

第二、中国共産党は、たえず社会主義陣営の力をつよめ、たえずアジア、アフリカ、ラテン・アメリカの民族・民主運動をつよめ、たえず各国人民の革命闘争をつよめ、たえず世界平和をまもる運動をつよめて、アメリカをかしらとする帝国主義とだんこたかうことによつてのみはじめて世界平和は確実な保障をうるものと考えている。世界平和をかくとくするには、主として全世界の人民大衆の力、人民大衆の闘争にたよらなければならぬ。世界平和をまもるたたかいかには、アメリカ政府をふくむ帝国主義国の政府とあれこれの問題について、国際緊張の緩和をはかるための話し合いをおこない、各国人民の根本的利益をそこなわないという原則のもとに、ある種の妥協をして一定の取り決めを結ぶことは必要なことである。だがどのようなときでも、世界平和のかくとくは、けつして話し合いにたよるだけであつてはならないし、けつして帝国主義に望みを託してはならないし、けつして人民大衆のたたかいかから離れてはならない。中国共産党を攻撃する人びとは、こうしたわれわれの正しい主張を、世界戦争回避の可能性を信じないものというように歪曲しているが、かれらは実際には人民大衆の力と人民大衆の闘争にたよつて世界戦争を防止することに、不信の念をいだくとともに反対しているのである。かれらは全世界の人民に、帝国主義の「英知」、「保証」、「善良な願い」を信じるよう要求し、世界平和の望みを帝

國主義との「相互の折り合い」、「相互の譲歩」、「相互の迎合」、「賢明な妥協」に託している。かれらは、各国人民の根本的利益が損われることもかまわないで、革命の原則を放棄し、ではほかのものにも革命的原則を犠牲にすることを要求してまで、帝國主義に平和を乞い求めるのである。

歴史上の無数の事実が証明しているように、各国人民の根本的利益を損い、革命の原則を放棄して帝國主義に平和を乞い求めても、真の平和は絶対にえられるものではない。反対に、帝國主義侵略者に気焰をあげさせるだけのことである。フィデル・カストロ同志は、「平和の道は各国人民の権利を犠牲にし、各国人民の権利をおかす道ではない。なぜなら、そうすることはまさに戦争を誘発する道だからである」といつているが、そのとおりである。

第三、中國共産党は、「世界平和をまもる闘争は民族解放運動、各国人民の革命闘争とたがいに支持しあい、切り離すことのできない関係にあるものとみている。民族解放運動と各国人民の革命闘争は、帝國主義の戦争勢力を弱め、世界平和をまもる偉大な力である。民族解放運動と各国人民の革命闘争は、発展すればするほど世界平和をまもるうえに役立つてくる。社会主義國、各國の共産主義者、全世界の平和を愛する人民はあくまで民族解放運動と各国人民の革命闘争を支持すべきであり、あくまで民族解放戦争と人民革命戦争を支持すべきである。

中國共産党を攻撃する人びとは、われわれのこうした正しい主張を「好戦的」だといって非難しているが、実際には、かれらは世界平和をまもる闘争を民族解放運動、各国人民の革命闘争と対立させ、民族解放戦争、人民革命戦争と対立させているのである。かれらの見るところによると、抑圧されている民族や抑圧されている人民は帝國主義や反動派から「お恵み」をうけることができるだけで、帝國主義や反動派とたたかってはならない、でなければ世界平和の邪魔をすることになる、のである。抑圧されている民族や抑圧されている人民が帝國主義や反動派の武力による弾圧に直面したときでも、もし革命戦争によって反革命戦争に反対するなら、「収拾のつかない結果」をうみだすことになる、とかれらは考えている。こうしたかれらの誤った主張は、すべての抑圧されている民族と抑圧されている人民が革命に立ちあがることに反対し、すべての抑圧されている民族と抑圧されている人民がおのれの革命闘争と革命戦争を放棄して、永久に帝國主義や反動派による暗黒支配と奴隸化に甘んじることを要求するものとしか考えられない。

事實は、民族解放運動と人民革命闘争のどの勝利も、帝國主義の戦争勢力に打撃をあたえ、それをよわめ、世界の平和勢力を強化、拡大していることを証明している。もしも、革命をおそれ、革命に反対する立場をとって、民族解放運動と人民革命事業の挫折と失敗をまねくなら、それは平和勢力を損い、帝國主義が世界戦争をおこす危険を増大させるだけのことである。

要するに中国共産党は、どのようにして世界戦争を防止し、世界平和をまもるかの問題では、あくまで帝国主義を暴露すること、社会主義陣営の力を強化すること、あくまで民族解放運動と各国人民の革命闘争を支持すること、平和を愛する世界のあらゆる国々や人びともつとも広範に連合することを一貫して主張し、同時にまた、敵の内部の矛盾を十分に利用し、話し合いその他各種の形態による闘争を活用することをも一貫して主張している。すべてこれらのものは、世界戦争を防止し、世界平和をまもるうえに効果のあるものである。こうした主張は完全にマルクス・レーニン主義に合致し、モスクワ宣言とモスクワ声明に合致している。これは世界戦争を防止し、世界平和をまもる正しい方針である。われわれがこの正しい方針を堅持するのは、右にのべた各種の力の連合闘争にたよれば世界戦争を防止できると確信しているからである。これがどうして世界戦争回避の可能性を信じていないとか、「好戦的」だとかといえるだろうか。中国共産党を攻撃する人びとの主張どおりに、帝国主義を美化し、平和の望みを帝国主義に託し、民族解放運動と人民革命闘争に消極的な態度や反対の態度をとり、帝国主義に屈服し投降するならば、それは全世界の人民にニセの平和か真の戦争をもたらすだけのものである。これはすべてのマルクス・レーニン主義者、すべての革命的人民、平和を愛するすべての人民がどこまでも反対せざるをえない誤った方針である。

(二)

戦争と平和の問題についてのトリアツチおよび一部の同志とわれわれとのあいだの意見の相違は、核兵器と核戦争にたいする態度のうえにもはつきりとあらわれている。

中国共産党は、核兵器は空前の破壊力をもっており、核戦争がおきたら、人類は空前の災難にみまわれるだろうと一貫して考えている。だからこそ、われわれは終始、核兵器の全面的禁止、すなわち、核兵器の実験、製造、貯蔵、使用を完全に禁止することを主張しているのである。わが国政府は、アメリカをふくむアジア、太平洋地域のすべての国々からなる非核武装地帯をつくることをこれまでたびたび提案している。また、われわれは、平和を愛する全世界の国々と人民が核兵器禁止と核戦争防止のためにおこなっているあらゆる正義のたたかいを終始積極的に支持している。中国共産党が核兵器の破壊力を過小評価しているとか、世界を核戦争にひきずり込もうとしているとかといったいろんな議論はすべてでたらめもはなはだしい中傷である。

核兵器と核戦争の問題について、中国共産党を攻撃する人びととわれわれとの意見の相違の第一は、核兵器が出現していろいろ、戦争と平和についてのマルクス・レーニン主義の基本原理が「時代おくれ」になったかどうかという点にある。

トリアッチや一部の人は、核兵器の出現は「戦争の性質をかえた」、「戦争の正義の性質についての定義はあらためて考慮すべきである」と考えている。実際上かれらは、戦争はもはや政治の継続ではなく、戦争には正義、非正義の区別がなくなっている、と考えているのである。これは、戦争と平和についてのマルクス・レーニン主義の基本原理を根底から否定するものである。われわれは、核兵器の出現は戦争と平和についてのマルクス・レーニン主義の基本原理をかえていないし、またかえることはできない、と考えている。事実、核兵器の出現後、世界におきた多くの戦争は、依然として政治の継続であり、世界には依然として正義の戦争と非正義の戦争がある。戦争にはもはや正義と非正義の区別がなくなっていると考える人びとは、実際には、正義の戦争をおこなうことに反対し、あるいはそれを支持することを拒否しているのであり、あらゆる戦争に反対するブルジョア平和主義の立場に落ちこんでいるのである。

核兵器と核戦争の問題について、中国共産党を攻撃する人びととわれわれとの意見の相違の第一は、人類の前途にたいして結局、悲観主義の態度をとるべきか、それとも革命的楽観主義の態度をとるべきか、という点にある。

トリアッチや一部の人は、「人類の自殺」、「人類の絶滅」といったようなことをさかんに口に、一生き残った一部の人類が社会制度の問題でどのような傾向をとるかということについて

論議することさえ、無益なことである」といつている。われわれはこうした悲観的、絶望的な論調にはあくまで反対である。われわれは、社会主義陣営が強大な核優位をたもっている状況のもとでは、各国人民の核兵器、核戦争反対の闘争がさらに幅と深さをましてゆく状況のもとでは、帝国主義がさらに核優位をうしなつて、その核恐喝政策がもはや役にたたなくなつたことをさとり、たとえ核戦争をおこしてもその滅亡をはやめるだけのことであることをさとらざるをえなくなるそうした状況のもとでは、核兵器の全面的禁止は可能である、と考えている。巨大な破壊力をもつ兵器を禁止した前例はまえにもある。一九二五年にジュネーブで各国が、毒ガスあるいはそれに類似した毒物、細菌を戦争に使用することを禁止することについての議定書をつくつたのは、そのひとつの証明である。

われわれが核戦争防止のあらゆる可能な措置をこうしてもなお帝国主義がすべてを無視して核戦争をおこすならば、それは帝国主義の滅亡となるだけであつて、けつして人類の滅亡にはならない。モスクワ声明は、「もしも帝国主義の気違いが戦争をおこすなら、世界の人民は資本主義を一掃し、埋葬するであろう」と指摘している。すべてのマルクス・レーニン主義者は、歴史の発展は人類が核兵器をほろぼすのであつて、けつして核兵器が人類をほろぼすのではないといふことを確信している。国際共産主義運動の共同文書に違反する「人類絶滅」論者の断定は、か

れらが人類の前途にたいし、偉大な共産主義の理想にたいしてまったく確信をうしない、敗北主義のどろ沼に落ちこんでいることをしめすだけである。

核兵器と核戦争の問題について、中国共産党を攻撃する人びととわれわれとの意見の相違の第三は、結局、どのような方針をとれば核兵器禁止と核戦争防止の目的をとげる効果をたぎめることができるかという点にある。

トリアッチや一部の人は核恐怖の宣伝に熱中するとともに、アメリカ帝国主義がもてあそぶ核恐怖をまえにして「おそれおののく」のには「理由がある」というようなことを公然とのべている。トリアッチはまた「どんな代価を支払っても戦争はさけなければならない」といつている。

トリアッチや一部の人のこうした論法でゆけば、アメリカ帝国主義の核兵器による威嚇と恐喝の政策にたいしては、無条件に屈服する、あらゆる革命的理想とあらゆる革命的原则をのこらず放棄するという方法しかないことにならないだろうか。これが共産主義者としてとるべき立場だといえるだろうか。こうしたやり方で核戦争をほんとうに防止することができるだろうか。

こちらが「おそれおののく」と、アメリカ帝国主義も感動して善心をおこし、その侵略政策と戦争政策を放棄し核恐怖政策を放棄するようになる、というようなことは考えられないことである。事実はまだその逆で、こちらが「おそれおののく」おののくほどアメリカ帝国主義はま

すます居丈高になり、その胃袋をひろげ、核戦争をダシにおどしをかけ、醜をえて蜀をのぞむ式の要求をつきつけてくるようになるのである。こうした教訓がまだすくなくないとでもいうのだろうか。

人民大衆を立ちあがらせて核戦争と核兵器に反対させるには、人民大衆に核兵器のもつ巨大な破壊力を知らせる必要があるとわれわれは考えている。この破壊力を過小評価するのは明らかに間違いである。だがアメリカ帝国主義は現にやつきになつて核恐怖をバラまくことによつて、これらの核恐怖政策をおすすめしている。こうした状況のもとでは共産主義者は、核兵器のもつ破壊力を指摘すると同時に、アメリカ帝国主義による核恐怖の宣伝にたいし、核兵器禁止と核戦争阻止の可能性をつよく指摘しなければならないし、人民大衆の平和への願いを帝国主義の核威嚇政策にたいする義憤にかえ、人民大衆をアメリカ帝国主義の侵略と戦争政策に反対するたにかい

へとみちひかなければならない。共産主義者は絶対にアメリカ帝国主義の核恐怖政策のお先棒をかつぐ宣伝員になつてはならない。アメリカ帝国主義の核恐怖政策にたいしては徹底的にこれを暴露しなければならないし、平和を愛するすべての国々と人民をもつとも広範に立ちあがらせて、アメリカ帝国主義の侵略と戦争計画のひとつひとつの措置とだんこたたかつてゆくようにしなければならぬ、とわれわれは考えている。平和をまもる各種勢力の連合闘争にたよれば、ア

メリカ帝国主義の核恐喝政策もこれをくじくことができるとわれわれは確信している。これは核兵器禁止と核戦争防止の実現をかちとるための有効な、そして正しい方針である。

われわれは中国共産党を攻撃する人びとにたいして、やはりかれらがその悲観的な、誤った論調をすてて、マルクス・レーニン主義の真理を信じ、元気をだして広範な人民大衆の、帝国主義の核恐喝政策に反対し世界平和をまもる偉大な闘争に積極的にくわわるようすすめたいとおもっている。

(三)

トリアッチ同志や一部の同志は、「帝国主義とすべての反動派はハリコの虎である」という中国共産党のマルクス・レーニン主義的な論点に極力反対している。トリアッチはイタリア共産党のこんどの大会での一般報告のなかで「帝国主義を肩でおせば倒れるような単純なハリコの虎と断定することは」「誤りである」といつている。また、ある人は、げんざい帝国主義は核兵器の牙をもっている、どうしてハリコの虎でありえよう、といっている。

偏見は無知よりもいつそう真理からはなれる。トリアッチ同志や一部の同志は、もし無知でないなら、中国共産党のこの論点を故意に歪曲しているのである。

毛沢東同志と中国の共産主義者が帝国主義とすべての反動派をハリコの虎にたとえるのは、ながい全体的な観点になつてものをみ、本質的にもをみているのである。つまり、結局のところ、真に力をもっているのは人民大衆であつて、帝国主義とすべての反動派ではない、という意味である。

一九四六年八月毛沢東同志は、アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話ではじめてこの論点を提起した。そのころ、中国人民は困難な状況のもとにあつた。アメリカ帝国主義が極力後押ししていた中国国民党の反動派は、兵力、装備のうえでひじょうな優位にたち、全面的な内戦をおこしはじめていた。敵の気遣いじみた攻撃をまえにし、アメリカ帝国主義は無敵であるとおとぎ話をまえにして、たたかう勇氣があるかどうか、革命をやる勇氣があるかどうか、勝利をたたかいたいと勇氣があるかどうかは、中国革命と中国人民の運命にかかわるもつとも重大な問題であつた。この決定的な瞬間にあつて、毛沢東同志は、「帝国主義とすべての反動派はハリコの虎である」というマルクス・レーニン主義の観点で中国共産主義者と中国人民の思想を武装させたのである。毛沢東同志ははっきりとのべている。「すべての反動派はハリコの虎である。反動派は、見たところ、おそろしそつでも、実際には、なにもたいした力もつていない。ながい目で見れば、ほんとうに強大な力をもっているのは、反動派ではなくて、人民である。」

「蔣介石や、その支持者であるアメリカの反動派もすべてハリコの虎である。アメリカ帝国主義といえ、人びとはおそろしく強大なものだとおもっているようだし、中国の反動派もいま、アメリカの『強大さ』をもちだして中国人民をおどかしている。だが、アメリカの反動派も、歴史上のいつさいの反動派とおなじように、なんの力もないことが証明されるだろう。」

一九五七年十一月、毛沢東同志は、モスクワでひらかれた社会主義諸国の共産党・労働者党代表者会議での演説のなかで、ふたたびこの論点についてのべている。毛沢東同志はこういつている。「強大だといわれている反動派もすべてハリコの虎にすぎない。」「敵と闘うために、われわれはながい間のうちに一つの概念をつくりあげてきた。それはつまり、われわれは戦略のうえではいつさいの敵を蔑視しなければならないが、戦術のうえではいつさいの敵を重視しなければならない、ということである。言いかえれば、われわれは全体のうえではかならずそれを蔑視しなければならないが、個々の具体的な問題のうえではかならずそれを重視しなければならない、ということである。もしも、全体のうえで敵を蔑視するのでなければ、われわれは日和見主義のあやまりを犯すことになるだろう。マルクスとエンゲルスはただ二人だけだったが、当時すでに、全世界の資本主義はうちたおされるにちがいないと言った。しかし、具体的な問題、個々の敵の問題のうえでもし敵を重視しないならば、われわれは冒険主義のあやまりを犯すことにな

るだろう。」

毛沢東同志のこの科学的断定は、つとに中国人民革命の偉大な勝利によって立証され、そして、すべての抑圧されている民族と抑圧されている人民の革命闘争を鼓舞した。トリアッチ同志やこの論点を攻撃する人たちにききたいのは、いったい毛沢東同志の論点のどこが間違っているのか、ということである。

帝国主義と反動派についての毛沢東同志の分析は、レーニンの分析とまったく一致している。

レーニンは一九一九年に、当時「世界に覇をとんでいた」英仏の帝国主義を「粘土の足をした巨人」にたとえた。当時レーニンはこういつている。「世界帝国主義は巨大な、不敗の勢力であるから、それに反抗して立とうと企てたおくれた国の労働者は、無分別者だとおもわれた。だが、いま、……とうてい打ち勝つことのできない巨人とおもわれた帝国主義がその実『粘土の足をした巨人』であることが、誰の目にも明らかになっていることがわかる。」「一見巨大で不敗と見える国際帝国主義のこれらの勢力もたよりないものであり、われわれには恐ろしくもないものであり、かれらはすでに内部的にくさっている。」「(『レーニン全集』第三〇巻、一〇七〜一〇八ページ)。レーニンのいう「粘土の足をした巨人」と毛沢東同志のいう「ハリコの虎」はおなじ理窟のものではないだろうか。このレーニンの論点はどこが間違っているのか、このレーニ

ンの論点は「時代おくれのもの」なのか、ききたいものである。

歴史にあらわれた無数の事実は、帝国主義と反動派がすべてハリコの虎であることを証明している。一九一七年の二月革命と十月革命がおきるまでは、日和見主義者が出てきて、ツァーとブルジョア政府の力は大きくなったものだ、人民大衆が武器をとることは気違い沙汰だ、といった。しかし、レーニンとボルシェビキはあくまで日和見主義の思想に反対し、毅然として労働者・農民・兵士大衆を指導してツァーとブルジョア政府をくつがえした。歴史は、ツァーとブルジョア政府がハリコの虎にすぎないことを証明した。第二次世界大戦の前夜と大戦中には、宥和主義者と降伏主義者が出てきて、ヒトラー、ムッソリーニ、日本帝国主義は不敗の力をもっているといった。だが、各国人民はどこまでも宥和主義と降伏主義に反対し、ついに、反ファシズム戦争の最後の勝利をかちとつた。歴史はおなじように、ヒトラー、ムッソリーニ、日本帝国主義もハリコの虎にすぎないことを証明した。

戦略のうえでありのままに帝国主義とすべての反動派をハリコの虎とみるかみないかということとは、革命勢力と反動勢力をどのようにみるかという大きな問題であり、すべての革命的人民が闘う勇気をもつかどうか、革命をやる勇気をもつかどうか、勝利をたたかいたる勇気をもつかどうかということにつながる大きな問題であり、全世界人民のたたかいたる前途とその歴史的運命に

つながる大きな問題であるとわれわれは考えている。どのようなときでも、マルクス・レーニン主義者と革命家は、帝国主義と反動派をおそれるべきではない。帝国主義がのし歩いた時代が永久にすぎさつたこんにちでは、革命勢力が帝国主義と反動派をおそれるのでなくて、帝国主義と反動派が革命勢力をおそれるのが当然である。抑圧されているすべての民族と人民は、なによりもまず帝国主義と反動派にうち勝つ革命的な信念、革命的な雄志、革命的な気概をもつべきである。でなければ、どのような革命も永久に望みはない。マルクス・レーニン主義者と革命家は、すべての降伏主義および軟弱無能の思想にだんこ反対し、「帝国主義とすべての反動派はハリコの虎である」という思想で広範な人民大衆を教育し、敵の威勢をくじき、味方の志気を高め、広範な人民大衆に革命にたいする決意と確信をもたせ、革命にたいする遠い見通しとゆるぎない態度をもたせてはじめて革命の勝利をかちとることができるのである。

帝国主義が核兵器をもつようになってからも、それが腐朽したものであり、没落しつつあるところのものであり、見かけたおしのものであるという帝国主義の本質はすこしもかわっていないし、人民大衆が歴史発展の決定的な力であるというマルクス・レーニン主義の基本原理もすこしもかわってはいない。毛沢東同志がストロングとの談話のなかで、はじめて、帝国主義とすべての反動派はハリコの虎であるといったのは、帝国主義が原子兵器をもつようになってからのこと

である。その談話のなかで、毛沢東同志はこう指摘している。「原子爆弾はアメリカの反動派が人をおどかすために使っているハリコの虎で、見かけはおそろしそうでも、なにもおそろしいものではない。もちろん、原子爆弾は一種の大量殺人兵器ではあるが、しかし、戦争の勝敗を決定するのは人民であつて、一つや二つの新兵器ではない。」歴史は、帝国主義が核兵器をもつても、たにかう勇氣をもつた革命的人民は誰も腰をぬかさなかつたことを証明している。中国革命の勝利、朝鮮、ベトナム、キューバ、アルジェリアその他の国の人民の革命闘争の偉大な勝利は、いずれもアメリカ帝国主義が核兵器をもつていふというさうした状況のもとでかちとられたものである。帝国主義はがんらいが牙まで武装した、そして人をとつて食うしろものである。だが大砲の牙をもつていふと、タンクの牙、ロケットの牙、核兵器の牙をもつていふと、さらにはまた現代科学技術の装備しうるとのよな牙をもつていふと、帝国主義の腐朽、没落、ハリコの虎の本質をかえることはできない。要するに、核兵器の牙であろうと、どのよな牙であろうと、帝国主義のもつ必然的な滅亡の運命をすくうことはできないのである。帝国主義の核兵器の牙も他のどのよな牙も最後には世界人民の手によつて帝国主義とともに歴史博物館へおくり込まれるであらう。

「帝国主義とすべての反動派はハリコの虎である」というこの論点を攻撃する人びとは、あきらかに、革命家としてもつべき革命的氣質をすっかり失い、目先のことしかみえない、きもつ玉のちいさい人間になりはてている。われわれはこの人たちに、やはりかれらが自分の運命を帝国主義の運命と結びつけないようにすることを忠告しておきたい。

(四)

トリアッチ同志および一部の同志とわれわれとの意見の相違は、平和共存の問題にもあらわれている。

中国共産党と中国政府は、社会制度をことにする国々のあいだで平和共存がおこなわれることを一貫して主張している。中国は有名な平和共存五原則の提唱者である。平和共存の五原則を基礎として中国は、世界の多くの国々と友好関係を樹立するとともに、順次、イエーメン、ビルマ、ネパール、アフガニスタン、ギニア、カンボジア、インドネシア、ガーナと友好条約または友好・相互不可侵条約をむすび、ビルマ、ネパールなどの国とは円満に境界問題を解決した。これらの事実は、なんびとも打ち消すことはできない。

ところが、国際共産主義運動の隊列のなかに、あらうことか、中国が平和共存に反対しているといつてさかんに中傷と攻撃をくわえる人間が出ているのである。かれらがさうしたことをする

のは、かれら自身が平和共存の問題についてもっているマルクス・レーニン主義に反した誤った観点をおおいかくすためのものでしかない。

平和共存の問題については、われわれを攻撃する人とわれわれとの意見の相違はつぎの点にある。われわれは、社会主義国は領土保全と主権の相互尊重、相互不可侵、相互内政不干渉、平等互恵、平和共存を基礎として、社会制度をことにする国々とのあいだの正常な国際関係の樹立に努力すべきである」と考えている。社会主義国の側からいえば、こうすることにはなんの困難もない。障害は、帝国主義や各国の反動派のほうから来ている。平和共存が闘争を経ないでもおこなわれるようになるなどは絶対に考えられないことである。平和共存の関係が樹立されたら、国際的規模における階級闘争がなくなり、社会主義と資本主義というふたつの制度の対立がなくなり、被抑圧民族と抑圧民族との対立がなくなるなどということはなさら考えられないことである。一九六〇年のモスクワ声明は、「各国間の平和共存は、修正主義者が断言するように、階級闘争の放棄を意味するものではない。社会制度をことにする国の共存は、社会主義と資本主義とのあいだの階級闘争の一形態である。」と指摘している。ところが、トリアッチ同志や中国を攻撃する人びとは、「平和共存」をつうじて、「全世界の構造を革新し」、一種の「新しい国際秩序」を樹立し、全世界に「人びとと各国人民の自由、福祉、独立、個人の全面的発展、人

格の尊重、各国間の平和協力などにたいする願望を満足させうる経済と社会秩序をうちたて」、「戦争のない世界」をつくることができるというように考えている。いいかえれば、「平和共存」をつうじて、社会主義と資本主義という二つの制度が対立し、被抑圧民族と抑圧民族が対立している「世界の構造」をかえることができるし、帝国主義と反動派が存在している条件のもとでも、あらゆる戦争をなくして「戦争のない世界」を実現することができる、というわけである。

トリアッチその他の同志のこうした主張は、平和共存についてのレーニンの原則をすっかりあらため、階級闘争についてのマルクス・レーニン主義の学説を放棄して、実際には、国際的規模において階級闘争を階級協力にかえ、社会主義制度と資本主義制度の融合を鼓吹するものである。いま、アメリカ帝国主義は、いわゆる「自由世界の大家庭」をつくるのだといつてわめきたて、いわゆる「平和的進化」によつて社会主義国を「自由世界」なるものの中に合併しようと夢みている。トロー一味はげんにアメリカ帝国主義の提灯をもって、世界の「経済的一体化」や「政治的一体化」をとなえている。平和共存のなかで「全世界の構造を革新する」ことを主張する人びとは、アメリカ帝国主義と一線を画すべきではなからうか。トロー一味と一線を画すべきではなからうか。

平和共存をつうじて「戦争のない世界」に到達できるというにいたっては、でたらめもはなはたしいといわねばならない。当面の情勢のもとでは、平和を愛する全世界のすべての勢力が広範な国際的・反帝統一戦線を結成してともにたたかえば、帝国主義が新たな世界戦争をおこすのを阻止することができる。だが、世界大戦を防止すること、あらゆる戦争をなくすことは別問題である。戦争の根源は帝国主義と反動派にある。帝国主義と反動派が存在しているという条件のもとでは、あれこれの戦争のおきる可能性も存在している。戦後十七年の歴史はさまざまな局地戦争がひっきりなしにおきたことをしめしている。抑圧されている民族と抑圧されている人民は、どうしても革命に立ちあがらないではない。帝国主義や反動派が武力に訴えてこれらの革命をおしつぶそうとしている状況のもとでは、国内戦争と民族解放戦争の勃発は避けられない。マルクス・レーニン主義者は、すべての戦争をなくして「戦争のない世界」に到達するのは、帝国主義制度をくつがえし、人間が人間を抑圧し、人間が人間を搾取するあらゆる制度を掃蕩してからのことであり、それ以前ではありえないと一貫して考えている。

平和共存の問題で、われわれを攻撃する人びととわれわれとの意見の相違は、さらにつきの点にある。われわれは、社会制度をことにする国々の平和共存と、各国の被抑圧民族、被抑圧階級の革命とは同一種類の問題ではなく、種類のこととなった問題であると考えている。平和共存の原

則は、社会制度をことにする国々の相互関係の面に適用されるだけで、被抑圧民族と抑圧民族との関係の面にも、それからまた被抑圧階級と抑圧階級との関係の面にも適用することはできない。抑圧されている民族や抑圧されている人民にとつての問題は革命闘争をおこなつて帝国主義や反動派の支配をくつがえすことであつて、帝国主義や反動派との平和共存ではないし、まだありえない。

ところが、トリアッチや中国を攻撃する人びとは、かれらのいわゆる「平和共存」の観点を植民地・半植民地の人民と帝国主義者・植民地主義者との関係の面にまでおしひろげている。かれらはいつている。「いまなお一〇億の人口をさいなんでいる飢餓の問題」、「後進地域の生産力と民主主義の発展の問題」についてもただ、「話し合いによつて合理的な解決方法をもとめ、情勢を悪化させて収拾のつかない結果をうみだすような行動に訴えて解決することはさけるべきである」と。かれらには、抑圧されている民族や抑圧されている人民の革命の火花が気にいらない。かれらは、一点の火花も世界大戦をひきおこすおそれがあるといつている。こうした論法は、実際には被抑圧民族に植民地支配者と「平和共存」することをとめるものであり、民族解放戦争はもちろんのこと、反抗することも、独立をめざす闘争もやらないで、植民地支配にあまんなじることをとめるものである。もしもこの論法でゆけば、中国人民、朝鮮人民、ベトナム人

民、キューバ人民、アルジェリア人民その他の国の人民が革命に立ちあがったことはすべて「平和共存」の原則に反しているし、誤りをおかしたことになるのではなからうか。こうした論調と帝国主義者や植民地主義者の説教とのあいだにいったいどんなちがひがあるのか、われわれの理解に苦しむところである。

とくにおどろかされることは、トリアッチと一部の人がさらに、国際的規模における階級協力の観点の後進地域にたいする「共同関与」の面にまでおしひろげている点である。「社会構造をことにする国々」の協力は後進地域の進歩を促すための「共同関与」を可能にする、とかれらはいう。この論法はあきらかに新植民地主義のために幻想をばらまくものである。後進地域にたいする帝国主義の政策はどのような形のもの、どのような色合いのものであろうとすべて植民地主義の略奪政策であるほかになく、後進地域の進歩に関心をもつものでは絶対にありえない。社会主義国についていえば、もちろん、後進地域の人民を支援すべきであり、まず民族の独立をめざすかれらのたたかいを支持し、かれらが独立したのちには、さらに、かれらが民族経済を発展させるのを支援しなければならない。だが、社会主義国は後進国にたいする帝国主義の植民地主義政策の尻馬にのることは絶対にしてはならないし、かれらといつしよになつて後進地域に「共同関与」することなどはなおさらしてはならない。もし誰かがそういうことをやれば、それはプロ

レタリア国際主義にそむくものであり、帝国主義と植民地主義の利益に奉仕するものである。

抑圧されている民族や抑圧されている人民がいったい帝国主義者・植民地主義者と「平和共存」できるものだらうか。後進地域にたいする「共同関与」というのはいったいどのようなことなのか。コンゴ事件がそのもつともよい回答である。国連安保理事會が満場一致決議を採択してコンゴにたいして国際的干渉をおこなったさい、国際共産主義運動の隊列のなかで、ある人は、これを国際協力実行の模範例と考え、国連の関与によつて植民地主義を一掃し、コンゴ人民に独立と自由をえさせることができると考えた。だが結果ははたしてどうだったか。コンゴの民族英雄ルムンバは殺され、ルムンバの後継者ギゼンガは拘禁され、多くの愛国の志士も殺され、あるいは拘禁され、もりあがつていたコンゴの民族独立闘争は大きな挫折にあつた。コンゴは、ひきつづき老舗の植民地主義者に隷属することになつたうえに、アメリカ帝国主義の植民地にされて、以前にもまず苦難のなかにつき落とされた。抑圧されている民族や抑圧されている人民と帝国主義者・植民地主義者との「平和共存」、後進地域にたいする「共同関与」をいまなおとなえている人びとにたずねるが、諸君はコンゴ事件のいたましい教訓を忘れたとでもいうのだからか。

平和共存に反対するといつて中国を中傷する人びとは、インドとの関係の面でも、中国が誤り

をおかしたというようなことをいつて攻撃している。かれらは、この真相にかかわりなく、是非の区別をつけずに、中国はインドと衝突をおこすべきでなかったと頭ごなしにきめつけている。この問題についてトリアッチは「われわれは中華人民共和国の要求のなかにいつさいの合理的で正しいものがふくまれているのを知っている。われわれはまた、武力行動がインド側の攻撃によつて開始されたことも知っている」とのべた。こうした態度は、中国側が境界での衝突をいどんだと頭ごなしに中傷する自称マルクス・レーニン主義者よりはいくらか公正である。ところが他方トリアッチは、やはり是非をそちのけにして中印武力衝突を「道理にかなわぬ、馬鹿げたもの」といつている。トリアッチ同志におたずねしたが、インドの反動グループの気違いじみた領土要求と大規模な武力攻撃に直面して、中国は、いつたいどうすれば「道理」にかなない、「馬鹿げ」ていないというのか。中国はインドの反動グループの理不尽な要求と軍事攻撃の前に屈服してはじめて「道理」にかなない、「馬鹿げ」たものでなくなるとでもいうのだろうか。社会主義の中国は、手をこまねいて他人におのれの広大な領土をゆずり渡してはじめて「道理」にかなない、「馬鹿げ」たものでなくなるとでもいうのだろうか。

中印境界問題にたいするトリアッチ同志や一部の同志の立場に決められている平和共存の問題についてのかれらの観点はこうである。つまり、平和共存の政策の実行にあたって、社会主義国

は資本主義国にたいして、なにがなんでも折り合うことだけしか許されず、武力攻撃をうけたときさえも自衛の手段をこうしてはならず、おのれの領土主権を放棄しなければならぬ、というのがそれである。こうした観点と社会主義国の平和共存の原則とのあいだにどんな共通点があるか、ききたいものである。

平和共存に反対するといつて中国を中傷する人びとは、キューバ人民の反米闘争を支持する中国人民の正義の立場をも攻撃している。英雄的なキューバ人民とかれらの革命的指導者フィデル・カストロ首相が、キューバの主権をおかす国際査察をだんこ拒否し、正義にかなった五項目の要求を提出したとき、中国人民はプロレタリア国際主義の一貫した立場にもとづいて、全国にわたり大規模な大衆デモをおこない、独立・主権・尊厳をまもるキューバ人民をだんことして支持したが、そのどこが間違つていたのだろうか。ところが、ある人は中国を、カリブ海の情勢に困難をもたらし、世界を核戦争におしやるものだといつて一再ならず攻撃した。これは、中国にたいするもつとも悪らつな、もつとも卑劣な中傷である。

中国人民が、国際査察に反対し、主権をまもるキューバ人民のたたかいをだんことして支持したことが、どうして平和共存に反対するものといえるのだろうか。どうして人を核戦争においやるなどといえるのだろうか。中国もまた、キューバに圧力をかけて、かれらに国際査察をうけい

れさせたら、それでやっといわゆる「平和共存」に合致するようになるでもないのだろうか。もしもある人びとが口先ではキューバの五項目の要求にたいする支持を表明しながら、実際には、中国人民のキューバ支持に反対するとしたら、それはかれらがキューバの五項目の要求を支持しているのがいつわりであることを暴露するものではないだろうか。

中国共産党と中国人民は、歴史の運命を左右するものは、どのような兵器でもなくて、人民大衆の偉大な力である、と一貫して考えている。何度もいつてきたことであるが、われわれは一度もキューバにミサイル基地を設けることを主張したこともなければまた、キューバからのいかわゆる攻撃的兵器の撤去をさまざまにたこともない。われわれは、核兵器をもてあそんで国際紛争解決の手段にするのがマルクス・レーニン主義者の態度であるなどと考えたことはいちどもない。われわれはまた、カリブ海の危機にさいして核戦争を回避したのを「ミュンヘン」だなどと考えたことはいちどもない。しかし、われわれは、他国の主権を犠牲にするという方法で、帝国主義との妥協を手に入れることにはこれまでもつよく反対したし、いまもつよく反対しており、こんどもつよく反対するであろう。こうした妥協は、割引なしの宥和主義、割引なしの「ミュンヘン」としか考えられないものである。これはわれわれ社会主義国の平和共存政策とはなんの共通点ももっていない。

(五)

トリアッチ同志やイタリア共産党の一部の同志は、實際上、国際的規模にわたって階級闘争を階級協力にとりかえることを主張するばかりでなく、かれらのこうした「平和共存」の概念を資本主義国内の被抑圧階級と抑圧階級の関係にまでおしひろげている。トリアッチは「わが国の国内情勢のもとでわれわれがとっている行動のすべては、全世界の構造の革新をめざす偉大な闘争をイタリア国内へ転化させたものにはかならない」といつている。この「行動のすべて」とは、いわゆる「民主主義と平和のなかで社会主義へむかって前進する」ことであり、いいかえれば、「構造改革」によつて社会主義への道をあゆむということである。

イタリア共産党が社会主義革命事業のなかでとっている路線については、われわれはこれを正しくないと考えてはいるが、しかしこれは結局イタリアの同志が自分で決定することからなので、われわれもこれにくちばしをいれようとしたことは一度もなかった。だが、トリアッチ同志がかれらの「構造改革」論を「国際共産主義運動全体の共同路線」といい、しかも一面的に、平和的移行が「労働運動と共産主義運動の世界戦略の原則になった」といつている以上、また、この問題はさらにマルクス・レーニン主義のプロレタリア革命とプロレタリア独裁についての基本

原理に関連し、あらゆる資本主義国におけるプロレタリアートと人民の解放の獲得という根本問題に関連しているので、いまはわれわれも、国際共産主義運動の一員として、マルクス・レーニン主義者としてわれわれの見解を発表しないわけにはゆかない。

すべての革命の根本問題は権力の問題である。マルクスとエンゲルスは、『共産党宣言』のなかで、「労働者革命の第一歩はプロレタリアートが支配階級になることである。」と書いています。この思想はレーニンのすべての著作をつらぬいている。レーニンは、『国家と革命』のなかで、ブルジョアジーの国家機構を粉砕し、うちくだいてプロレタリア独裁をうちたてなければならぬことを強調した。レーニンは「労働者階級は『できあいの国家機構』を粉砕し、うちくだくべきであつて、それをそのまま奪取するにとどまつてはならない」、「階級闘争をみとめると同時にプロレタリア独裁をもみとめる人だけが、マルクス主義者である。」といつてゐる。レーニンはまた「権力を除外してはすべてが幻想である」ともいつてゐる。一九五七年のモスクワ宣言が社会主義革命の共通法則をのべるにあつては、マルクス・レーニン主義政党内核とする労働者階級が勤労大衆を指導して、あれこれの形のプロレタリア革命をおこない、あれこれの形のプロレタリア独裁をうちたてることによつてのみ社会主義の道を歩むことができる、といふことであつた。

マルクス・レーニン主義の基本原理とモスクワ宣言が指摘した社会主義革命の共通法則が世界どこにも、あてはまるものであり、もちろん、イタリアにも適用できることは疑いのないところである。

ところが、トリアッチ同志やイタリア共産党の一部の同志は、『国家と革命』のなかでレーニンがおこなつた分析はもはや「不十分」であり、プロレタリア独裁にふくまれてゐる意味もすでに変わつてきている、とみてゐる。かれらがもちだした「構造改革」論によれば、こんにちのイタリアでは、プロレタリア革命を経る必要はなく、ブルジョア国家機構を粉砕する必要も、プロレタリア独裁をうちたてる必要もなく、ただ、イタリア憲法の枠内で「一連の改革」をやり、大企業の有国化、経済の計画化、民主主義の拡大を通じて、「順序を追つて漸進的に」、「平和的に」社会主義へはいつてゆくことができる、といふのである。かれらは実際には、国家のある種の超階級的な道具とみなして、ブルジョア国家でも社会主義政策を実施できると考えてゐるし、また、ブルジョア民主主義を超階級的な民主主義とみなし、プロレタリアートはこうした民主主義をよりどころにしても国家の「指導階級」に昇進できるのだといふように考えてゐる。こうしたいわゆる「構造改革」論は、マルクス・レーニン主義のプロレタリア革命とプロレタリア独裁にいつての学説を完全に裏切つてゐる。

39
これはマルクス・レーニン主義の学説を完全に裏切つてゐる。

こんにちのイタリアは、独占ブルジョアジーの支配している資本主義国である。イタリア憲法は、イタリアの労働者階級と人民の長年にわたる勇敢なたたかいによって獲得された若干の成果をそのなかにふくんではいらぬもの、しかしそれは依然として資本主義的所有制の保障を核心とするブルジョア憲法である。イタリアでおこなわれている民主主義は、すべての資本主義国でおこなわれている民主主義と同様に、ブルジョア民主主義であり、つまりブルジョア独裁である。イタリアでおこなわれている国有化は、社会主義制度のもとにおける国家資本主義ではなくて、独占ブルジョアジーの利益にしか奉仕できない国家資本主義である。独占ブルジョアジーは、おのれの搾取と支配をたもつためには、ときに何らかの改良主義的な方法をとることもありうる。

資本主義国では、労働者階級が日常的な経済闘争や民主主義をめざす闘争をおこなうこともまったく必要なことである。だが、こうした闘争をおこなうのは、労働者階級と勤労人民の生活を部分的に改善するためであり、そしてそれよりもっと大切なこととして、時機の成熟をまつて権力を奪取できるように、大衆を教育し組織し、大衆の自覚を高め、革命の力を蓄積するためである。マルクス・レーニン主義者は、改良をめざす闘争に賛成すると同時に、どこまでも改良主義に反対する。労働者階級と勤労人民の政治的要求と経済的要求がいったん独占ブルジョアジーのゆるす枠をこえると、独占資本の利益を代表するイタリア政府がただちに弾圧にのりだしたこ

改良と
革命

は事実が証明している。階級闘争のこの不変の法則はすでに無数の歴史上の事実によって証明されている。階級闘争のこの不変の法則はすでに無数の歴史上の事実によって証明されている。独占ブルジョアジーが自分からすすんでその利益と支配を放棄し、歴史の舞台からしりぞくなどということがどうして考えられるだろうか。

この点については、トリアッチ自身もまったく知らないわけではない。かれはブルジョア憲法の枠内で、「大独占資本支配グループの権力を粉砕すること」ができる」と極力宣伝してはいても、それならいったいどうやればこの権力を粉砕できるのかということについては「われわれにはわからない」と答えている。これからは、トリアッチおよびイタリア共産党の一部の指導者の「構造改革」論は、史的唯物論と客観的事実についての科学的研究にもとづいたものではなく、観念論と幻想にもとづいたものである。ところがかれらは、あろうことか、自分でもたよりにならぬと知っているところとしたら、ものを極力もちあげるとともに、それを「国際共産主義運動の共通路線」であるというふうにいっている。かれらがそうすることは、実際にはただ、プロレタリアートの革命闘争をむしろ弱体化させ、資本主義の支配をまもり、根本的に社会主義革命を否定する役割をはたすだけである。これこそは新しい社会民主主義の思潮ではないだろうか。

ここ数年、資本主義国では、共産党内の一部の墮落分子と社会民主党内の一部の右翼分子が、

「構造改革」論なるものをさかんにとなえるとともに、それによって共産党を攻撃している。こうした事実はその自身がいわゆる「構造改革」論と社会民主主義とのいちじるしい類似、マルクス・レーニン主義とのなほはたしいへだたりを物語るに十分である。

モスクワ宣言とモスクワ声明は、社会主義革命が平和的方式もしくは非平和的方式によって実現されることを指摘している。ある人はこれを楯に「構造改革」論を弁護しようとしているが、それは無駄である。平和的移行を一面的に「共産主義運動の世界戦略の原則」だというのは、これも誤りである。マルクス・レーニン主義の観点から見れば、平和的移行が実現できるなら、もちろん、プロレタリアートと人民全体にとって有利である。ある国で平和的移行の可能性があらわれたならば、共産主義者はこの可能性の実現に努力すべきである。だが可能性と現実、願望とその願望実現の可能、不可能とは結局ふたつのがらである。事実、いままでのところではまだ歴史のうえにも、資本主義から社会主義へ平和的に移行した前例はない。共産主義者は、革命の勝利にたいするすべての望みを平和的移行に託すべきではない。ブルジョア自身がからすんで歴史の舞台からひきさがることにはけつしてありえない。これは階級闘争の普遍的な法則である。共産主義者は、革命にたいするそなえをいささかもゆるがせにすることはできないし、反革命による襲撃を迎え撃つそなえ、プロレタリアートが権力を奪取するという革命の切

和移行
と
移行
的

迫した時機にあたって、ブルジョアが武力に訴えて革命を弾圧するときは武力によってブルジョアをうち倒すそなえがなければならない。つまり、共産主義者はふたつの手筈をととのえておくこと、すなわち、革命の平和的發展にそなえると同時に、革命の非平和的發展にも十分にそなえておくことが必要である。そうすることによってはじめて、革命的情勢が到来しても、ブルジョアが暴力によって革命を弾圧してきたときも、手おくれの状態におちいらずにすむのである。また、たとい平和的方式によって権力を獲得できるにしても、外国帝国主義の武力干渉や帝国主義を後楯とする反革命の武装反乱にただちに対処するだけのそなえをしておくことは必要である。共産主義者は、その主な注意力を、苦心して革命の力を蓄積し、必要なあいにはブルジョアジーの武力攻撃を迎え撃つというそうしたそなえの面にそそぐべきであつて、平和的移行を一面的に強調して、その主な注意力を平和的移行の可能性の面にそそぐべきではない。でなければ、必然的に、プロレタリアートの革命的意志をマヒさせ、思想的におのれを武装解除し、政治的にも組織的にもまったくそなえない受け身の状態におちいり、ついにはプロレタリアートの革命事業を葬り去ることになる。

トリアッチ同志とイタリア共産党の一部の指導者の、いわゆる「民主主義と平和のなかで社会主義へむかつて前進する」という論点には、修正主義の老舗カウツキーのことを思いおこさせ

カウツキー

るものがある。四十余年前にカウツキーはこういつている。「プロレタリアートの社会革命は……すでに民主主義がうちたてられているところでは、暴力によらず、平和な経済的、法律的、道徳的な手段によつて実現できるだろうと、わたしは推測する」(カウツキー『プロレタリア独裁』、一九一八年出版)。共産主義者は、カウツキーのような連中の社会民主主義者と一線を画すべきではなからうか。

(六) トロツキ主義の回顧

トリアツチ同志や一部の同志がマルクス・レーニン主義から、モスクワ宣言とモスクワ声明からどんなに遠く離れ去っているかは、さいきんかれらがユーゴスラビアの修正主義一味とひじょうに親しくなっているいろいろな事実によつていつそあらわになつていく。

こんどのイタリア共産党の大会は、マルクス主義を裏切つたトロツキ一味の代表をまねいて出席させるとともに、かれらに反中国の演壇を提供した。この大会で、トリアツチ同志と一部の同志は、公然とトロツキ一味のために弁護し、トロツキ一味の「経験の価値」について吹聴した。

われわれは、トリアツチ同志と一部の同志にたいし、いつたい諸君はモスクワ声明の諸君にたいする拘束力をまだみとめているのかいなのか、注意を喚起したい。一九六〇年のモスクワ声明には「各国共産党はこぞつて現代修正主義者の『理論』の集中的表現である国際日和見主義のユーゴ的変種を非難した。ユーゴスラビア共産主義者同盟の指導者たちは、マルクス・レーニン主義を裏切り、マルクス・レーニン主義を時代おくれのものと宣言し、おのれの反レーニン主義的な修正主義的綱領によつて一九五七年の宣言に對抗し、ユーゴスラビア共産主義者同盟を国際共産主義運動全体に対立させている」とはつきり書かれている。トロツキ一味にたいするモスクワ声明の非難が誤つていてもいふのたろうか。各国共産党が一致して採択した決議が誰かひとりの人間あるいは一部の人間の主観的な願望によつて投げ捨てられてかまわないうでもいふのたろうか。

いずれにせよ、事実はあくまで事実であり、共産主義の裏切り者は結局共産主義の裏切り者である。モスクワ声明の断定はなんびともこれをくづかえしえないものである。

トロツキ一味はかれらの徹底した修正主義的綱領を放棄していないし、さきごろ発表されたユーゴスラビア憲法草案でもこの修正主義的綱領にかじりついている。

トロツキ一味は、帝国主義に身売りしていわゆる「社会主義」を建設する「独自の道」をあらためていないどころか、ますます力をこめてアメリカ帝国主義の侵略政策と戦争政策に大馬の

劣をとっている。さいきんアメリカ帝国主義はまたもや一億ドルあまりの「援助」を褒美としてチトー一味にあたえた。チトー一味はひきつづき「超ブロック」、「積極的共存」の外衣をまとい、百万手をつくしてアジア、アフリカ、ラテン・アメリカ各国人民の民族民主運動を破壊し、

社会主義陣営の団結を破壊し、平和を愛するすべての国の団結を破壊しようとしている。

チトー一味の修正主義路線が発展してゆくにつれて、^{また}アメリカ帝国主義へのチトー一味の依存がつよまってゆくにつれて、ユーゴスラビアははやくから社会主義国ではなくなり、資本主義ははやくからユーゴスラビアで一步一步復活している。

ユーゴスラビアにおける資本主義の復活は、ブルジョアジーの反革命的政変または帝国主義の侵入によるものではなくて、チトー一味の墮落によってしだいに実現されたものである。ここでは、つとにレーニンが指摘したように、「革命のもつとも重要な問題は国家権力の問題である。どの階級の手が権力がにぎられているかということがすべてを決定する」(『レーニン全集』第二五卷、三五七ページ)のである。「国の性質は、どの階級が国家権力をにぎり、そしてどのような政策を執行するかということによって決定される。現在のユーゴスラビアでは、国家権力はチトー一味の手になぎらられているが、この一味はマルクス・レーニン主義と共産主義事業を裏切り、ユーゴスラビアの労働者階級とユーゴスラビア人民の根本的利益を裏切り、徹底した修正主

義の路線をとっている。ユーゴスラビアの農村では富農や資本主義の勢力がめざましい勢いで増大し、階級分化が激化している。ユーゴスラビアのあらゆる経済領域にわたって資本主義の自由競争と利潤の法則が支配的な役割をはたし、資本主義の無政府状態がはらんしている。

チトー一味を帝国主義がどう評価しているかをうかがつてみるのもまんざら無益ではない。アメリカ帝国主義はチトー一味を「先導の羊」にたとえているが、これはつまり、ユーゴスラビア修正主義の影響によつていくつかの社会主義国を社会主義陣営からつれだし、ケネディの「自由世界の大家庭」につれてゆくとうとするものである。ユーゴスラビアの実例はひとつの問題をはつきり語っている。それは、ひとつの国が社会主義の道に踏み出したのちにおいてもなお社会主義と資本主義の二つの道のたたかいがあり、資本主義復活の危険があるということである。

プロレタリア革命の勝利ののちに、墮落、変質の現象があらわれたり、新しいブルジョア分子がうまれたりすることも、理解できないことではない。レーニンはいっている。歴史のうえにはさまざまなる変質現象がみられるが、ある条件のもとでは、ソビエトの職員のみならずがながら新しいブルジョア分子がうまれる可能性がある、と。まさにレーニンの指摘したこの新しいブルジョア分子は、すでにユーゴスラビアで支配的な地位を占めているのである。

結語のなかでトリアッチ同志はこういっている。「ユーゴスラビアではすでに資本主義が復活

している、というようなことをいえば——これが真実でないことはみんなが知っている——その人の口にするには、ほかのこともすべて信じてもらえなくなる。というのは、ほかのこともすべて誇張したとばにすぎないというふううけとられるからである」。こういうえば、中国共産党のマルクス・レーニン主義的論点を完全に反駁できるかのように、かれは考えているらしい。しかし、詭弁を弄しても真理をかえることはできない。かれらがユーゴスラビアを社会主義国といはる唯一の理由は、ユーゴスラビアにはひとりの資本家もみあたらないということである。色眼鏡をかけてものを見れば、真相はとらえにくいのが普通である。トリアッチその他の人のプロレタリア革命、プロレタリア独裁、社会主義についての理解にチトー一味と共通する点がたくさんある以上、かれらがユーゴスラビアにおける資本主義の復活を見て見ぬふりをし、ユーゴスラビアの新しいブルジョア分子を見て見ぬふりをするのももちろん怪しむにたりないことである。

もつとも驚くべきことは、一部の人びとが自分たちと叛徒のチトー一味との親密な関係について極力吹聴すると同時に、中国共産党をさかんに攻撃し、われわれとアルバニア労働党とのマルクス・レーニン主義のうえにたつ団結を「許すことができない」といつていることである。これらの人びとは、手段をえらばず、マルクス・レーニン主義の政党であるアルバニア労働党を国際

共産主義運動から除外しようとすると同時に、モスクワ声明が叛徒として確認したチトー一味を国際共産主義運動の隊列のなかにむりやりおしこもうとしてやっきになっている。かれらがそのようにする目的はいつたどこにあるのか。中国のことわざに、「物は類を以て聚り、人は群を以て分る」というのがある。チトー一味にはあれほど親愛の情をしめしながら、マルクス・レーニン主義を堅持する兄弟党をこれほどまでに憎む人びとは、自分がいまだどこに立っているかを考えてみる必要はないだろうか。

(七)

トリアッチ同志やかれとおなじ観点になつ同志とわれわれとの一連の問題についての意見の相違は、結局のところ、マルクス・レーニン主義の基本原則が時代おくれのものになっているかどうか、モスクワ宣言とモスクワ声明が時代おくれのものになっているかどうかという根本的な性質の問題につながっている。

トリアッチ同志およびいちぶの同志は、時代の変化、民族の特徴その他を口実に、マルクス・レーニン主義は「時代おくれのもの」になった、モスクワ宣言のなかで指摘されている社会主義革命の共通の法則はイタリアには適用されない、と考えている。イタリア共産党の指導者のひと

りであるパイエタは、この点でもつと先のほうまで行っている。「マルクス主義はなんとレーニン主義と異なっていることか、マルクスのマルクス主義はまたなんとレーニンのレーニン主義と異なっていることか」とかれはいう。ほかならぬこうした口実のもとにかれらは、マルクス・レーニン主義の基本原理をあらため、放棄し、マルクス・レーニン主義に反したかれらのいわゆる「イタリアの道」をもちだし、売りさばこうとしているのである。

マルクスとエンゲルスによつて基礎をうちたてられた科学的社会主義は、人類社会の発展法則をしめくくつたものであり、世界のどこにもあてはまる普遍的な真理である。歴史の発展は、マルクス主義を「時代おくれのもの」にしなかつたばかりか、まつたく反対に、マルクス主義が無限の生命力をもっていることをさらに証明した。全世界のプロレタリアートが客観的世界を認識し、客観的世界を改造するたばかりの実践のなかで、マルクス主義はたえず新しい発展をとりあげている。レーニンは、新しい歴史の条件のもとに、帝国主義時代の特徴にもとづいてマルクス主義を創造的に発展させた。レーニンが死んでからは、各国のプロレタリア政党がそれぞれの革命闘争のなかで、ふたたびマルクス・レーニン主義の宝庫をゆたかにした。だが、この新しい発展はすべてマルクス主義の基本原理から出発したものであつて、決してマルクス主義の基本原理からはなれたものではない。

レーニンがきりひらいた十月革命の道、そのご一九五七年のモスクワ宣言がしめくくつた社会主義革命についての共通の法則と社会主義建設についての共通の法則は、世界各国の人民が資本主義を一掃し、社会主義へとすすむ共通の道である。十月革命いらい世界情勢には大きな変化が生じたが、十月革命の道に体现されたマルクス・レーニン主義の基本原理はますますすがやかしい光を放っている。

トリアッチは、自分の誤つた観点を弁護するために、中国共産党がつている路線は「一九一七年の三月から十月にいたる革命の過程でボルシェビキがつつた戦略戦術の路線とすこしも合致していない」というようなことまでいつている。これは中国革命の歴史の実際はすこしも合致していない。中国共産党は、毛沢東同志の指導のもとに、長期にわたる革命闘争のなかで、教条主義と経験主義に反対し、「左」翼日和見主義と右翼日和見主義に反対する闘争のなかで、マルクス・レーニン主義の普遍的真理を中国革命の具体的実際とむすびつけ、創造的にマルクス・レーニン主義を発展させた。中国革命はその他の国の革命と同様に多くの特徴をもっているにもかかわらず、中国の共産主義者は一貫して中国革命を偉大な十月革命の継続とみなしている。中国革命はほかでもなく十月革命の道にそつて勝利をおさめた革命である。トリアッチの中国革命にたいする歪曲は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理と社会主義革命の共通の法則に反した

かれ自身の独特の路線のために口実をつくろうとしていることをしめすだけのものである。

マルクス・レーニン主義政党は、マルクス・レーニン主義の普遍的真理をそれぞれの国の革命の具体的実践にむすびつけ、それぞれの国の具体的条件にてらして、創造的に社会主義革命の共通の法則を運用しなければならぬ。マルクス・レーニン主義は実践の発展にともなうてたえず発展するものである。マルクス・レーニン主義政党が一定の時期と一定の条件のもとで提起した個々の論点は、ちがった時期とちがった条件のもとでは、状況の変化のために、新しい論点にとりかえなければならぬ。そうしないと教条主義の誤りをおかすことになり、共産主義事業に損害をもたらすことになる。だが、マルクス・レーニン主義政党は、どんなときも、社会生活のなかのいちぶの新しい現象を口実に、マルクス・レーニン主義の基本原則を頭から否定し、マルクス・レーニン主義を修正主義にすりかえ、共産主義事業を裏切るようなことをしてはならない。

ある共産党のある発展段階においては、教条主義とセクト主義が主な危険になる可能性がある。モスクワ宣言とモスクワ声明が教条主義反対とセクト主義反対の必要を指摘したのはまったく正しい。しかし、モスクワ宣言とモスクワ声明が指摘しているように、国際共産主義運動全般についていうとき、当面の条件のもとでは、主な危険は現代修正主義である。現代修正主義は、「マルクス・レーニン主義を歪曲し、マルクス・レーニン主義の革命的精神を去勢し、理論と

実践のうえにブルジョア・イデオロギーを反映し、労働者階級の革命的意志をマヒさせ、帝国主義者と搾取者の抑圧に抗するたにかい、平和・民主・民族解放をめざすたにかい、社会主義の勝利をめざすたにかいのなかで、労働者と勤労大衆を武装解除し、離散させている」のである。いま、現代修正主義者は、教条主義反対を口実にマルクス・レーニン主義に反対し、「左」翼冒險主義反対を口実に革命を否定し、戦術の融通性を口実に無原則的な妥協をとまえ、降伏主義を実行している。現代修正主義にたいしてだんことした闘争をおこなわなければ、国際共産主義運動は重大な損害をこうむることになるであろう。

最近あらわれた、マルクス・レーニン主義にそむき、国際共産主義運動の団結を破壊する逆流は、モスクワ宣言とモスクワ声明の断定の正しさをあらためて立証した。修正主義の主な特徴についてレーニンはいっている。「そのばあいはあいで自分の行動を決定し、日々の諸事件に、些細な政治の風むきに順応し、プロレタリアートの根本的利益と、全資本主義体制、全資本主義的進化的基本的特徴とをわすれ、目前の現実の利益または仮想された利益のためにこの根本的利益を犠牲にすること、——これが修正主義の政策である。」(『レーニン全集』第一五卷一九ページ)革命的なプロレタリアート、革命的な人民は要するにマルクス・レーニン主義のさし示す正しい道にそつてすすむものである。この道は困難な、曲りくねった道ではあるが、しかし勝利に到

達する唯一の道である。社会の歴史の発展は帝国主義の「理論」にしたがうことはありえないし、修正主義の「理論」にしたがうこともありえない。どのような人物、どのような政党、どのようなグループであろうと、そしてそれらのものが労働運動にかつてどれだけの働きをしていようと、ひとたびマルクス・レーニン主義の道をはなれて修正主義の道にふみこみ、そしてその道にそつてすべり落ちてゆくならば、ブルジョアジーの下僕に變じ、プロレタリアートから唾棄されるほかはない。

われわれはやむなくここで、トリアッチ同志およびイタリア共産党の一部の同志とわれわれとの主な意見の相違について公開的に討論した。これは、もしかれらがさきに公然と挑戦し、そしてあくまで公開的討論を要求するようなことをしていなかつたら、われわれとしてももとのぞむところではなかつた。だが、たとい公開的な討論をさせられることにはなつても、われわれとしてはやはり同志的な討論によつてこうした意見の相違がとりのぞかれることをここからぞんでゐる。トリアッチおよびかれとおなじ観点をもつ同志がますますマルクス・レーニン主義から遠ざかるのを見て残念におもいながらも、われわれはやはり、かれらがこれ以上深みに落ち込むことなく、道に迷つたことをさとつてマルクス・レーニン主義の立場にかえり、モスクワ宣

言とモスクワ声明の革命的原則にたちかえることをここから期待してゐる。われわれは前方に目をむけたいとおもつてゐる。われわれは、各国の共産党と労働者党の代表者会議をひらいて当面の国際共産主義運動における意見の相違を解決すべきことを何度も提案した。各国の共産主義者は敵にたいする闘争の共通の利益を重んじ、プロレタリアートの革命事業を重んじ、モスクワ宣言とモスクワ声明にさだめられた兄弟党の關係についての準則にしたがい、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義のうえにたつて意見の相違をとりのぞき、団結をつよめるべきだとわれわれは考へてゐる。これは全世界の労働者階級と全世界人民の期待するところである。

百余年らしい各国労働運動の歴史は、マルクス主義とさまざまな日和見主義とのげしいたたかひにみちた歴史である。国際共産主義運動はいままでずっと改良主義、社会民主主義、修正主義にうちかつたたかひのなかでたえず前進してきた。こんにち、さまざまな修正主義者が一時さわざたてることができるとしても、しかしこれはかれらの強さをしめすものではなく、逆に、かれらの弱さをさらけ出すものである。げんざい国際共産主義運動にあらわれている修正主義の思潮、新しい社会民主主義の思潮は独占ブルジョアジーとアメリカ帝国主義の需要にこたえるものであり、実質的には独占ブルジョアジーとアメリカ帝国主義の政策の産物である。だが、さまざまな修正主義は、各国の抑圧されている民族と抑圧されている人民の革命闘争の勝利の発展を

阻止することもできなければまた、帝国主義の最後の滅亡を救うこともできない。

一九一三年にレーニンは、日和見主義反対の闘争にさいしてマルクスの学説の歴史的運命について述べたとき、つぎのように指摘した。マルクス主義は日和見主義者によって歪曲されたとはいえ、世界各国人民の革命闘争の発展によつてたえず新しい実証と新しい勝利をえてきた、と。当時レーニンは、「きたるべき歴史的时代は、プロレタリアートの学説としてのマルクス主義に、さらに大きな勝利をもたらすであろう。」（『レーニン全集』第一八巻、五八四ページ）と正しい予言をしている。いまわれわれは、マルクス・レーニン主義が新しい重大な歴史の関頭に立たされているのを感じている。マルクス・レーニン主義の思潮と反マルクス・レーニン主義の修正主義の思潮とのたかひは、ここにふたたび、するどい形で各国共産主義者の議事日程にのぼつてきた。われわれは、どのように複雑な闘争を経ようと、最後にはマルクス・レーニン主義の思潮が勝利をおさめることを確信している。

百余年前に、マルクスとエンゲルスは、『共産党宣言』のなかで全世界にむかつて、つぎのような勇敢なそして誇り高いよびかけをおこなつてゐる。「支配階級をして共産主義革命のまえに戦慄せしめよ！プロレタリアがこの革命によつて失うものは鉄鎖だけである。かれらがうるものは全世界である。」この偉大なよびかけは、共産主義の事業に献身するすべての革命家をはげまし、

し、全世界のプロレタリアートをはげまし、かれらを未来への確信にあふれさせ、毅然としてあらゆる障書を突破して勇敢に前進させている。いま、国際プロレタリアートの隊列はますます強大となり、各国人民の自覚はいよいよ高まり、世界平和・民族解放・民主主義・社会主義をめざす闘争はつぎつぎに勝利をおさめ、社会主義と共産主義の偉大な思想は苦難にあえぐ被抑圧民族と抑圧されている人民をいよいよ広範にひきつけている。帝国主義と反動派をして、全世界の労働者階級およびすべての被抑圧民族、抑圧されている人民の偉大な革命の潮流のまえに戦慄せしめよ！マルクス・レーニン主義については最後の勝利をおさめ、全世界の労働者階級と全世界人民の革命事業については最後の勝利をおさめるであろう！

トリアツチ同志とわれわれとの意見の相違

1963年1月 初版発行

定価 30 円

出版者 外 文 出 版 社

中 華 人 民 共 和 国

北 京 阜 成 門 外 万 寿 荘

編 号 : (日) 3050-485

3-J-540P

00040

